

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 野本 京子



学位申請者 曹 恩美

論文名 張赫宙の日本語文学研究—植民地朝鮮／帝国日本のはざままで

[審査の経過と結論]

曹恩美氏より博士学位請求論文「張赫宙の日本語文学研究—植民地朝鮮／帝国日本のはざままで」が提出されたことを受け、2016年6月22日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が選任され、学位審査が開始された。

審査委員会は、野本京子（教授、日本近現代史・農業史）が主査を務め、米谷匡史（教授、主任指導教員、社会思想史・日本思想史）、橋本雄一（准教授、中国近現代文学・植民地文化研究）、柴田勝二（教授、日本近代文学）、中野敏男（本学名誉教授、歴史社会学・社会理論）の各氏が副査を担当し、5名の委員で審査をおこなった。

審査委員は、各委員がそれぞれの専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2016年8月5日に公開の最終試験をおこなった。そして、論文および最終試験の内容について協議をおこない、審査委員会は全員一致で、曹恩美氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

[論文の概要]

本論文は、植民地朝鮮出身の作家として1930年代から活躍し、これまで「親日」作家としてきびしく批判されてきた張赫宙の文学を、植民地と帝国が矛盾・葛藤を抱えながら関連しあう「植民地帝国」のなかで生み出された「日本語文学」として再検討するものである。従来の評価軸となってきた親日・反日の二分法、ナショナルな枠組をこえて、朝鮮と日本が関連しあうトランスナショナルな関係性のなかで、同時代の文化状況を丹念にふまえながら、張赫宙の文学をとらえかえしている。

本論文では、プロレタリア文学系の雑誌『文学案内』（1935～1937年）や、新協劇団による「春香伝」上演（1938年）に注目し、植民地朝鮮と帝国日本の文学が境界をこえて関連しあう文化状況を資料にもとづいて詳細に明らかにしながら、張赫宙が朝鮮と日本の間

ではたした具体的な役割を解明している。

また、張赫宙が「満洲」（中国東北部）の視察をふまえて書いた長篇『開墾』（1943年）や、在日朝鮮人青年の日本軍への志願を描いた短篇「岩本志願兵」（1943年）などを取りあげ、朝鮮から「満洲」や日本へと移動した在外朝鮮人の苦悶の精神史を表現する文学として読解している。

本論文は、以下のような構成となっている。

序論

- 第1章 「帝国」日本のメディアと張赫宙の日本語文学
—雑誌『文学案内』（1935～1937年）を中心に
- 第2章 越境／交通する文化空間
—「春香伝」上演（1938年）をめぐって
- 第3章 張赫宙の「満洲」体験
—長篇小説『開墾』（1943年）を中心に
- 第4章 在日朝鮮人青年の憂愁
—小説「岩本志願兵」（1943年）をめぐって

終章

序章では、植民地と帝国が矛盾・葛藤を抱えながら連関しあう「植民地帝国」のなかで張赫宙の「日本語文学」をとらえなおす課題と枠組を提示し、本論文で用いる「日本語文学」という用語について論じている。

植民地朝鮮出身の作家たちが日本語で書いた文学については、「植民地文学」「在日朝鮮人文学」「〈外地〉日本語文学」などさまざまな用語で論じられてきた。本論文では、戦前に植民地化された地の文学者により、母語ではない帝国の「国語」である日本語を用いて、「植民地帝国日本」という歴史空間の中で創作活動をした文学を「日本語文学」と呼んでいる。そして、「なぜ日本語で書くか」にこだわり続けた在日朝鮮人作家・金石範の議論をふまえながら、日本文学でもなく朝鮮文学でもない、「植民地帝国」で生成された「日本語文学」として、張赫宙の文学をとらえかえしている。

さらに、韓国における「親日」文学に関する先行研究、日本と韓国における張赫宙に関する先行研究を検討し、親日と反日、抵抗と屈従という二分法的枠組を克服して、「植民地帝国」のなかで再検討していく課題を提示している。

第1章では、張赫宙が作品・批評を発表した『改造』『文芸首都』『文学案内』などの雑誌メディアに注目し、植民地と帝国をつなぐ文学のネットワークがどのように形成されたのかを解明している。とりわけ、植民地出身作家の作品を積極的に掲載したプロレタリア文学系の雑誌『文学案内』を取りあげ、編輯顧問として企画・翻訳に関わった張赫宙の

役割を論じている。『文学案内』は、「朝・台・中国新鋭作家集」（1936年1月号）、「朝鮮現代作家特輯」（1937年2月号）などの特輯を組み、朝鮮・台湾・中国の文学を日本文壇に翻訳・紹介して、植民地と帝国をつなぐ移植と相互交渉を試みていた。そのなかで張赫宙が、植民地朝鮮と帝国日本の狭間で宙吊りになりながら、両者をつなぐ重要な役割をはたしていたこと、「植民地帝国」のなかで「日本語文学」が生成していく文脈を明らかにしている。それは、「日本文学」への一方的な包摂ではなく、さまざまな相互交流の可能性が存在する場となっていた。

第2章では、日本語作家・張赫宙と、村山知義・安英一ら新協劇団のメンバーたちとの協同作業によって、朝鮮の古典「春香伝」が日本語演劇として翻案され、1938年に日本・朝鮮の各地で上演されたことに注目している。主に新協劇団の5年史、20年史、『月刊新協劇団』、上演パンフレットやプログラムなどの一次資料にもとづいて、「春香伝」上演に関わる具体的な協力関係を明らかにしている。そして、在日朝鮮人のプロレタリア文化運動の系譜に注目して、新協劇団員の安英一、小説家の金史良（金時昌）、労働運動家の金浩永らの関わりを明らかにして、朝鮮と日本の文学者・文化運動家のさまざまな協力関係によって「春香伝」上演が実現したこと、そこには植民地朝鮮と帝国日本の文化の相互交渉や越境、協同の可能性が芽生えていたことを論じている。また、朝鮮と日本の文学者たちが対話を交わした座談会「朝鮮文化の将来」をとりあげ、張赫宙が試みた文化の相互交渉の可能性が、植民地と帝国の間で矛盾・葛藤に直面し、宙吊りになってしまう状況を再検討している。

第3章では、張赫宙が戦時下の「大陸開拓文芸懇話会」に参加し、日本人移民・朝鮮人移民の開拓地を取材する視察旅行をおこなって、満洲開拓に関する作品・批評を数多く書いていたことに注目している。主に、万宝山事件（1931年）を題材に書いた長篇小説『開墾』（1943年）、「満洲」をめぐる旅行記・随筆集『わが風土記』（1942年）をとりあげて、張赫宙にとっての「満洲」という空間の意味を論じている。張赫宙は、中国と日本の狭間で苦難を生きる朝鮮人移民たちが生き残るための「民族協和」の可能性を「満洲」開拓に見出していたこと、そこには帝国日本の植民政策との「同床異夢」による共存と葛藤があったことを明らかにしている。

第4章では、張赫宙が1936年の東京移住以降、在日朝鮮人社会を現場で体験していたことに注目し、戦前に彼が描き出していた在日朝鮮人像について考察している。在日朝鮮人の居住地を取材したルポルタージュ「朝鮮人聚落を行く」（1937年）、在日朝鮮人青年を登場させた短篇「憂愁人生」（1937年）や「路地」（1938年）をとりあげ、在日朝鮮人の帰属をめぐる葛藤や錯綜したアイデンティティが表現されていたことを論じている。そして、苦悶を抱えた在日朝鮮人青年が民族差別解消の手段として日本軍兵士として志願する主題を描いた短篇「岩本志願兵」（1943年）を読み解きながら、志願兵制度や徴兵制が苦悶を克服する活路として描かれていること、その背景として描かれた高麗神社が「内鮮一

体」をささえる歴史的根拠として探求され、戦後まで続く張赫宙の精神的拠り所となっていくことを明らかにしている。

以上をうけて終章では、張赫宙が自身の文学について、帝国の日本文壇から名づけられる「植民地文学」として囲いこまれることを一貫して拒否していたことについて補足している。そして、朝鮮の文学が帝国の日本文学に一方的に同化・包摂されるのではなく、植民地と帝国、そして植民地と植民地の間での相互交渉が試みられていたこと、それらをつなぐキーパーソンとして張赫宙が重要な役割をはたしていたことを論じている。

そのうえで、本論文では十分に解明できなかった今後の課題として、張赫宙が「満洲」を視察する際に同行した日本人作家・朝鮮人作家たちの作品との比較を通じて、張赫宙の「満洲」認識の輪郭をさらに鮮明にしていくこと、龍瑛宗など台湾の「日本語文学」との比較を通じて、「植民地帝国」における「日本語文学」の意味をさらに深く解明していくこと、そしてこれらの「日本語文学」が、日本、朝鮮、台湾、「満洲」の当時の読者によってどのように受けとめられていたのかを、東アジアの出版流通の問題を含めてさらに掘り下げて考えるべきこと、などを挙げている。

[審査の概要—評価と問題点]

審査と最終試験では、本論文について、とくに以下のような点が高く評価された。

- ①親日と反日、抵抗と屈従という既存の二分法的枠組をこえて、植民地と帝国が矛盾・葛藤をかかえながら連関しあう「植民地帝国」という場に注目し、そのなかで生成する「日本語文学」として張赫宙文学を再検討する意欲作である。「植民地帝国」の歴史・文化研究という方法・視座は、冷戦後の1990年代に提起され、すでに20数年の蓄積があるが、『文学案内』などの雑誌メディアの詳細な検討によって、朝鮮と日本の文学が連関していく文脈を具体的に解明していることは重要な学問的貢献である。そして、張赫宙が朝鮮と日本の文学をつなぐキーパーソンとして重要な役割をはたしていたことも、本論文によって明らかになった重要な成果である。
- ②「春香伝」上演が、張赫宙と村山知義・安英一ら新協劇団メンバーたちとの協同作業でおこなわれたことに注目し、上演に関連する一次資料を詳細に検討して、朝鮮と日本の文化運動が連関していく文脈を具体的に明らかにしていることは重要な成果である。
「春香伝」上演に在日朝鮮人のプロレタリア文化運動が大きく関わっていたことは、既存の張赫宙研究ではほとんど注目されてこなかった点であり、朝鮮文学の日本語への翻訳をめぐる問題に関心が集中してきた従来の「春香伝」研究にたいして、新たな局面をきりひらく意欲的な研究成果となっている。
- ③張赫宙自身が朝鮮から日本へと移住した作家であり、朝鮮文学でも日本文学でもない矛盾・葛藤を抱えていたことに注目し、朝鮮を出て「満洲」・日本へ移住した在外朝鮮人の苦悶の精神史を表現する文学として読解していることは、単なる「親日」文学という

批判的評価をこえて、『開墾』や「岩本志願兵」などの作品の新たな読解の可能性を提示するものであり、有意義な成果となっている。

このような高い評価を受ける一方で、以下のようないくつかの疑問点や要望も提示された。

- ①張赫宙の文学を、朝鮮文学と日本文学が連関しあう相互交渉のなかで位置づけなおし、新たな読解を試みているものの、作品・テキストそれ自体の分析はやや弱い面がある。
「春香伝」上演をめぐる文化運動の連関は詳細に明らかにしているが、その演劇作品としての物語の分析が十分に深められていない。また、長篇『開墾』、短篇「岩本志願兵」のテキスト分析が、張赫宙の主観的意図に関する解釈にとどまっている面があり、分析・批評をさらに深めるべきであろう。また、テキストの背後にある当時の歴史状況についてもさらに検証をすすめ、歴史的事実と作品の虚構性との関係をめぐる分析を深めてほしい。農民の「満洲」開拓・入植の実態や、当時の農本主義・農村改革論の評価などについても検証・考察が不十分な面がある。
- ②張赫宙の文学を、朝鮮文学と日本文学をつなぎながら、植民地と帝国の狭間の苦悶を表現する文学として再検討しているが、それが彼の主観的意図をこえて、植民地権力との錯綜する関係のなかで、「同化」への翼賛・協力に帰結してしまう側面があった。親日と反日の二分法をこえるとしても、あらためて「親日」や「転向」の問題について分析を深めるべき点が残っている。根無し草の流民が、確かな拠り所を求めて強力にファシズムを支持してしまう面があり、周辺側から近代化・発展の力に魅入られてしまう植民地人のあり方を、張赫宙についても批判的に見るべきだろう。
- ③当時の植民地出身の文学者たちは、親日と反日、抵抗と協力の間のグレーゾーンをそれぞれに抱えていた。植民地出身の文学者たちが互いに差異をもったグラデーションのなかで、張赫宙がどのような位置にいるのか、十分に明らかになっていない。また、張赫宙は当時の日本のプロレタリア文学からさまざまな着想・手法を取り入れており、作品の具体的な分析をつうじて、文学史的視座からの考察もさらに深められるはずである。

これらの疑問に対する曹恩美氏のリプライでは、資料にもとづいて分析・論述できる範囲を明確に理解しながら、論述の意図と成果について真摯な応答がおこなわれた。本論文の問題点や限界についても十分に自覚しており、今後さらに研究を深めていく展望も持っていることが示された。

審査において指摘された疑問点や要望は、本論文の研究成果や学術的価値を高く評価した上で、研究をさらにブラッシュ・アップし、深めるべく提示されたものであり、本論文の意義を損ねるものではないことは審査委員の共通了解である。

審査の結論として、本論文は、張赫宙の「日本語文学」が、植民地朝鮮と帝国日本が連関しあうなかで生成していく文脈を詳細に明らかにし、朝鮮文学と日本文学をつなぎ、文化の相互交渉をめざした文学者としての意義を解明した重要な研究成果であり、「植民地帝国」の文学をめぐる歴史・文化研究に大きな貢献となるものと認められた。

以上により、審査委員会は全員一致で、この業績をもって曹恩美氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。